

テーマ

義足に子どもたちの夢をのせて

王子校中学校

第一学年

生徒

I 「」のテーマの記事を選んだ理由を書いっただけ。

僕は、短下肢装具をつけて歩行している。だから「走れる義足の記事が目にとまり引きこまれて読んだ。足を切断して義足をつけている子どもたちの走り方という願いをかかなるために、義肢装具生が開発に取り組んでいるのだ。僕はどのようにして義足を作っているのか深く調べ、そこには装具士さんのどんな思いがあるのか知りたいと考えたので、この記事を選んだ。

II 比べる記事のそれぞれの内容について分かったことを書いてください。

①について 義肢装具士の白井ニ美田さんは手や足を切断した人のために義手や義足を作っている。東京パラリンピックでのアスリートの活躍をきっかけに、義足で走りたいという小学生が増えてきた。白井さんは「走れる義足を開発して子どもたちのできることを増やし、自信につなげたい」と考えていることが分かった。

②について 現役の二人の運動士が、不登校の子もたちを支援するため、鉄道に関するスクールを開設している。鉄道を通じて、物理や電気街づくり、飲食など様々な仕事に関連したことを学ぶことができない。二人は、子どもたちの興味を広げたいという意気込みで、未来への可能性を広げていることが分かった。

①と②を比べて分かったこと、自分で調べてみたいこと。

①②とも子どもたちの可能性を広げるために仕事を続けているという共通点があった。どのような思いで子どもたちに寄り添っているのか調べたいと考えた。また、僕の担当の義肢装具士さんにインタビューをして想いなどを聞きたい。

III テーマ「」について、自分の考えや他の人と交流をして気付いたこと、調べたこと、提案などを書いてください。

僕の担当の装具士さんに義足を作る時の気持ちについてインタビューをしたところ、「手や足を失ってしまって、困っている人が笑顔になれますように」とか「患者さんの仕事や学校生活がうまくいってほしい」と話してくれた。相手の人生を思いやりながら作業しているのだと気付いた。僕の装具を作った時には、「走る用には加工していないのに、体育祭のリレーでたくさん走っていたからびっくりした。想定した以上に装具が役立っていて良かった」というのが本音だ。また、大人用との違いについては、「子どもは、日々成長するからサイズが合わなくなったりした時に何回も作り直す。その分を見込んで作る。それで難しさがあると実感した。

また白井さんの著書「転んでも大丈夫」という本を読んだ。全国に六万人以上いる義足の人はあまり外に出たがらないけれど、一方で義足で走れるようになるより新しい人生を前向きに生きている人もいる。「走れる義足」や「鉄道スクール」をきっかけに可能性を広げて夢をかなえられると思う。僕もたまたま運動もしたいし、色々なことに挑戦していきたいと改めて感じている。